

松下まり子*: 江戸時代以降の神戸市太山寺境内林の来歴

Mariko Matsushita*: Vegetation history since the Edo era around Taisanji Temple in Kobe, western Japan

1. はじめに

現在の六甲山系周辺はアカマツ、コナラの二次林が広く分布しているが、神社や寺の域内にはシイ、カシ類からなる照葉樹林が生育している。六甲山系は風化花崗岩からなる酸性土壌と温暖小雨の瀬戸内式気候のもと、江戸～明治時代には村の共有地、入会地を中心に、はげ山あるいはそれに近い荒廃地やマツ林が広がっていた（松下, 1997）。そんな中で、社寺林は鎮守の森として古来より地域の人々によって大切に保護されてきたものと考えられてきた。六甲山系西方神戸市西区太山寺のシイ、ウラジロガシ、ウバメガシなどからなる照葉樹林は、県下最大の自然林として兵庫県天然記念物に指定され、また貴重な自然のAランクに位置づけられている。しかし江戸時代に描かれた播州名所巡覧図絵太山寺（1803）を見る限り現在の林相とは異なるものであり、人と社寺林との関わり方も時代とともに変化してきたと思われる。そ

こで、江戸時代以降の太山寺境内林の来歴を絵図、地形図および森林土壌の花粉分析によって類推する。

2. 調査地の概要

調査地は太山寺を中心とする周辺域とする（図1）。太山寺は神戸市西区伊川谷町前開（東経 135°4'14'', 北緯 34°41'30'', 標高 85 m）にある天台宗の名刹で、国宝の本堂をはじめとする建築、絵画、彫刻、書籍、工芸品などの数多くの重要文化財や太山寺文書などの資料を所有するほか、境内をとりまく南東から北東の丘陵部（標高 100～160 m）に分布する照葉樹林は兵庫県の天然記念物に指定されている。この丘陵は、花崗岩からなる急峻な地形を呈し、山麓から山腹にシイ林が、山頂部にウバメガシ林が分布している（中西, 1973; 中西ほか, 1982）。かつては周辺部にアカマツ、コナラの二次林や田畑が広がる農村地域であったが、昭和50年代からの大規模開発

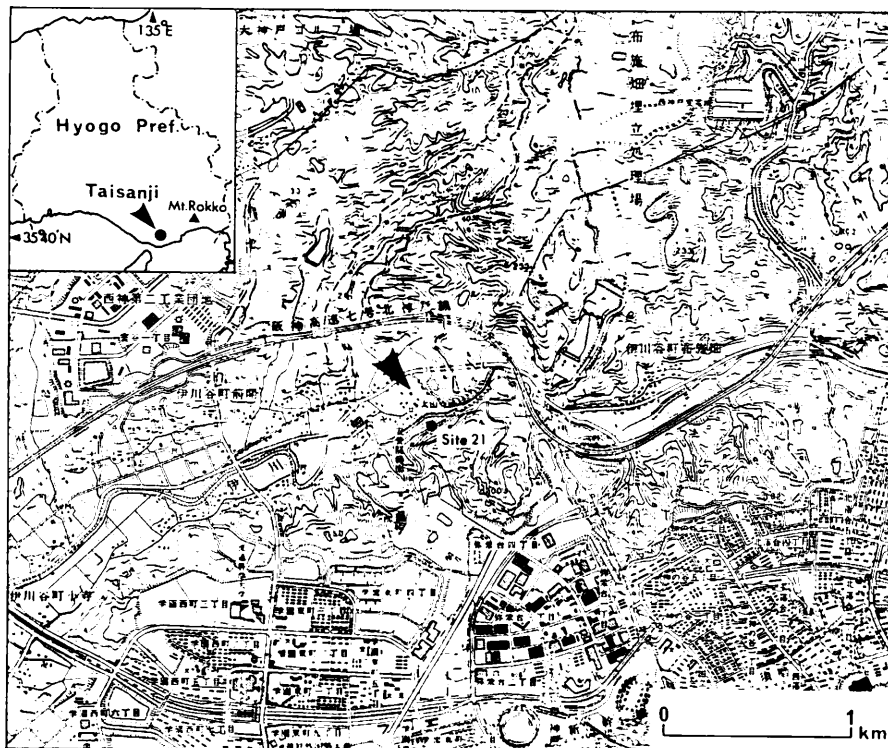


図1 太山寺の位置
国土地理院発行2万5千分の1「前開」（1995）使用。

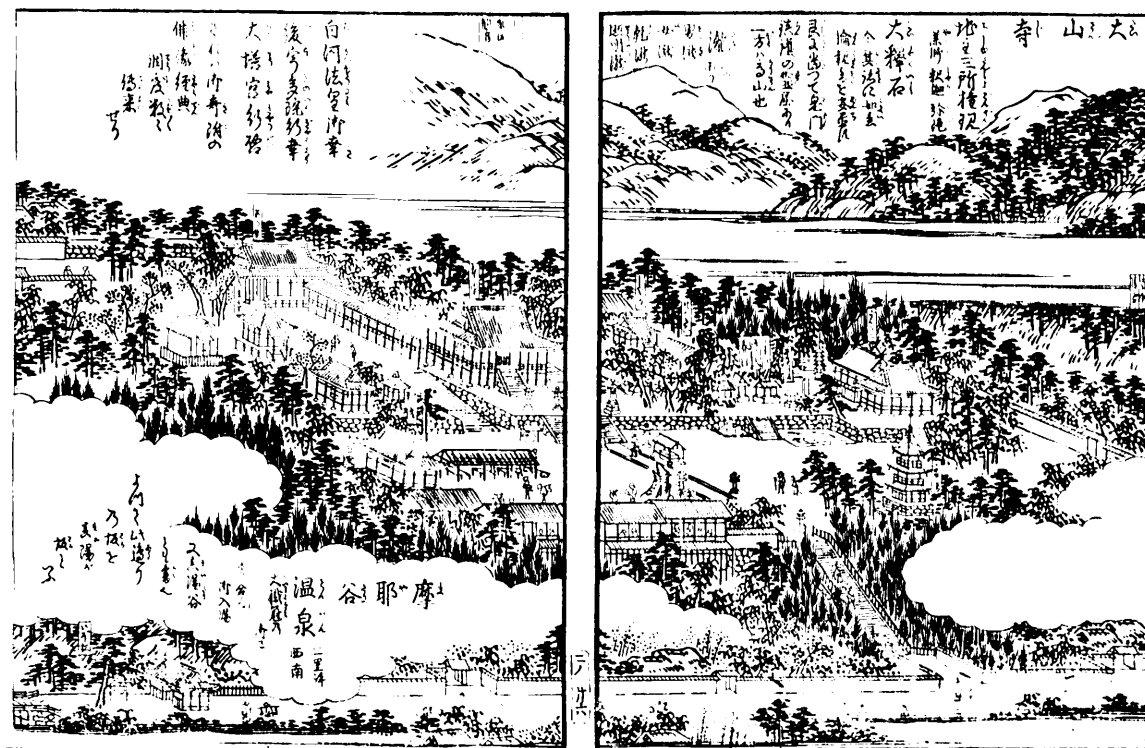


図2 播州名所巡覧図絵 (1803) 太山寺



図3 播州名所旧跡図絵 (1895) 太山寺

により、太山寺の南北を高速道路と地下鉄が走り、地下鉄沿線には学園都市、総合運動公園などが、北方にはゴルフ場や埋立処理場が建設され、太山寺の照葉樹林は稀少な自然となっている。

3. 絵図による植生景観の復元

播州名所巡覧図絵（1803）および播州名所旧跡図絵（1895）により、江戸～明治時代の植生景観の復元を試みた。絵図を用いる際、その資料性について十分考察する必要がある（小椋，1991）。今回用いたこれらの図絵は摂州須磨から播州各郡にいたる名所旧跡を描いた旅行書である。凡例には社寺、名所・古説などは実否を糺し俗説のうち妄説怪話は除いたとある。二つの絵図は時代も作者も異なるが、播州名所旧跡図絵（1895）の凡例が播州名所巡覧図絵（1803）のそれに類似していることから、後の作者が、播州名所巡覧図絵（1803）を手本とした可能性がある。したがって、描かれたものの違いが、時代による変化を表していると考えられるが、作者の個性が誇張や省略としてあらわれている可能性もある。これらの絵図はその点を考慮しなければならないが、当時の植生景観を復元するための重要な資料となる。

1803（文化元）年に描かれた播州名所巡覧図絵太山寺（図2）の中の解説文に「三方ハ高山也」とある。その背山の谷部と山裾にはマツが描かれているが、山頂部には植生は見られない。江戸時代（1800年頃）の太山寺周辺の植生はマツ林が主であると思われるが、丘陵頂部などでは、植生が貧弱で、はげ山に近い状態であった可能性が考えられる。境内にはマツとスギと思われる針葉樹および広葉樹、竹が配置されている。1895（明治26）年の播州名所旧跡図絵太山寺（図3）ではかなり細かい描写がみられる。山裾・境内にマツ、スギ、落葉した広葉樹、竹が描かれ、名木と思われる木には荒神杉、三本姿、疣姿、文殊松といった名が付けられている。背山ははげ地（草地?）とマツに広葉樹を交える。この広葉樹は境内のものと比較して葉をつけていることから常緑の可能性はある。また絵中に「山中楓樹漫」の文字がみられカエデが含まれていたことがわかる。明治時代半ば（1900年頃）の太山寺背山の植生も貧弱ではあるが、播州名所巡覧図絵（1803）に比較するとマツとともに広葉樹が描かれている点が異なっている。また、解説文中に「紳士方閲覧旁々登山少ナカラズ」とあり境内林は参詣の人々に親しまれるものであったようである。

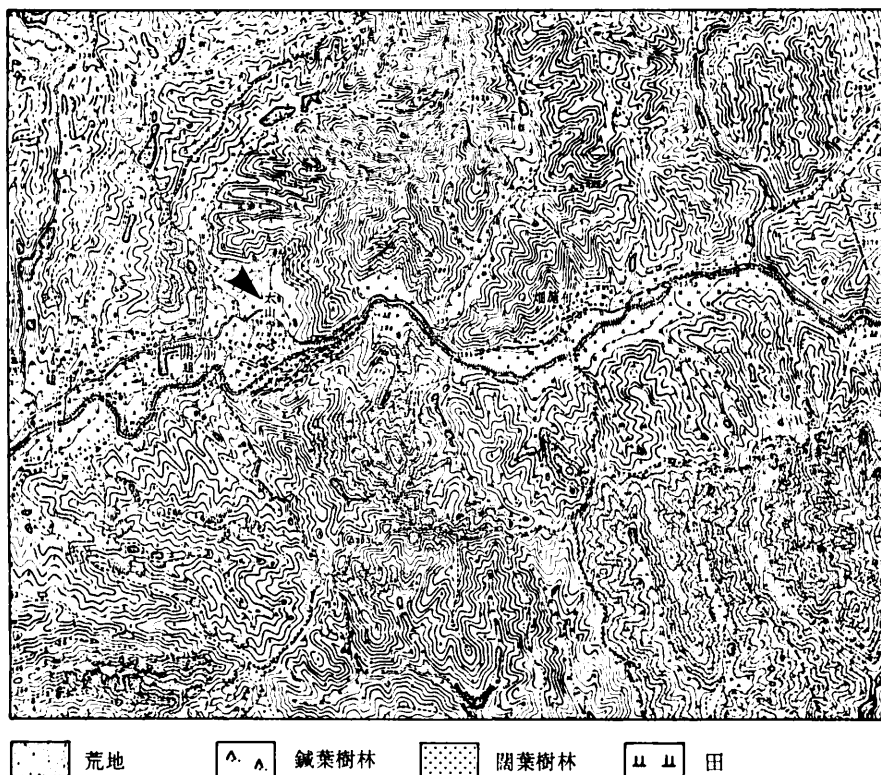


図4 明治時代末の太山寺周辺の植生景観
大日本帝国陸地測量部発行2万分の1「前開」（1910）を使用。凡例をスクリーントーンを用いて強調した。

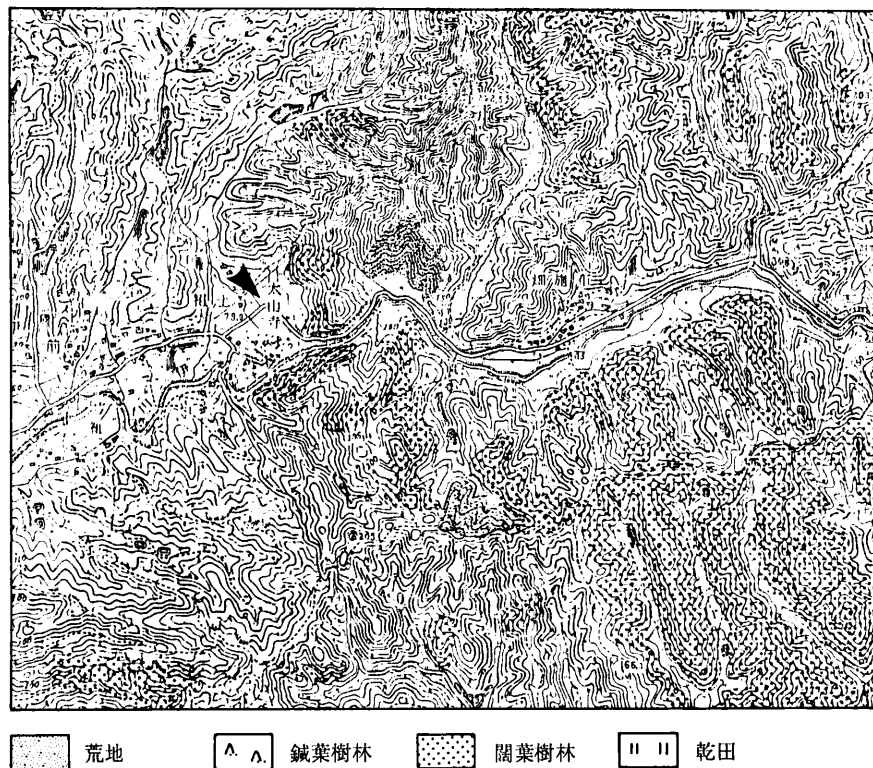


図5 大正時代末の太山寺周辺の植生景観
大日本帝国陸地測量部発行2万5千分の1「前開」(1923)を使用. 凡例をスクリーントーンを用いて強調した.

4. 地形図による植生景観の復元

参謀本部陸軍部測量局仮製地形図 図幅前開(1887), 旧版地形図 図幅前開(1910, 1923, 1935, 1947, 1967, 1995)を使用して植生景観の復元を試みた。

参謀本部陸軍部測量局仮製地形図は広範囲に測図した本格的な地形図として最古のものである。植生については森林を松林, 杉林, 檜林, 櫟林・柗林, 雑樹林に区分し, その大小も区別され, 日本の地形図の中では最も細かく分類されている。小椋(1992)は松林の大小について当時の写真との比較により, その区分を5mとした。また, 榛莽を有する荒地や尋常荒地が地図上に広く見られるが, 小椋(1992)は榛莽地を矮小な雑木を中心とした柴地あるいは矮小な雑樹の集合慢生する土地, 尋常荒地を人的管理の度合いの低い多様な雑草地であり, そこには矮小な樹木を混生することや裸地の見られることも珍しくなかったとしている。この仮製2万分の1地形図は1890(明治23)に完了し, その後の地形図は, 大日本帝国陸地測量部, 地理調査所, 国土地理院により順次担当され, 測図発行されてきた。1910(明治43)測図(2万分の1)での植生については, 森林は闊葉樹林, 雑葉樹林, 竹林に, 1923(大正12)・1935(昭和10)・1947(昭和22)

測図(2万5千分の1)では闊葉樹林, 雑葉樹林, 竹林, 棕櫚科樹林に区別されている。1967(昭和42)以降では広葉樹林, 針葉樹林, 竹林, しの地などの区別がみられる。荒地, 草地が区別されていたが1967年では荒地のみとなっている。

仮製地形図前開(1887)によれば, 太山寺背山は松林(大)と雑樹林, 周辺部は松林(小)と尋常荒地が分布している。1910年の地形図(前開)では, 太山寺は雑葉樹林と南部丘陵山麓と北部丘陵の一部が闊葉樹林となっており, 周辺には雑葉樹林の中に所々荒地が広がっている(図4)。1923年の図では周辺部の荒地はごく一部に縮小され, 闊葉樹林に置き換わり, 針葉樹林の中でも闊葉樹林が部分的に増加している(図5)。この状態は1935, 1947年まで同様である。1967年(図6)になると, 太山寺背山は広葉樹林となり, 周辺部は広葉樹林と針葉樹林が混交する。また太山寺の北部でゴルフ場が作られ, 大規模開発の兆しがみられる。現在(1995年)までに, 太山寺周辺では, 地山を切り崩してニュータウン, 工業団地, 運動公園, 地下鉄, 高速道路, 埋立処理場などの建設が相次ぎ, その結果植生の大半が失われ, 江戸～明治時代のものとは性質の異なる荒地の増加がみられる(図1)。

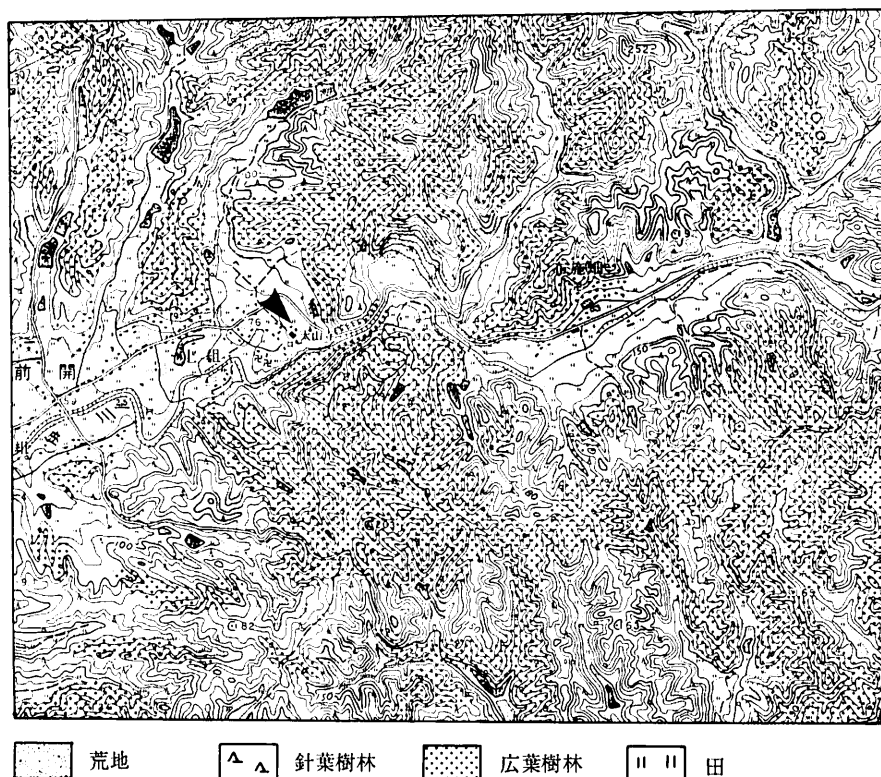


図6 昭和40年頃の太山寺周辺の植生景観
国土地理院発行2万5千分の1「前開」(1967)を使用。
凡例をスクリーントーンを用いて強調した。

5. 花粉分析による植生復元

森林土壌の花粉分析を行う際、土壌中の花粉・胞子化石の保存条件、層位的攪乱などを考慮しなければならない。太山寺の供試土壌は花崗岩からなる崩積性土壌であるので、土壌物質が付加される際に花粉が地中に封じ込まれたり水の流れ等で下方へ沈下していると推定される。ただし、土層の下部に存在する花粉・胞子化石ほど古いということは言えるであろう。さらに、土壌の花粉組成にのみ固有の局地性を利用してその場の植生や群落の歴史を明らかにすることができる（三浦，1990）。

花粉分析の試料には、太山寺南東方丘陵斜面（海拔90 m, N30W, 傾斜30°）のシイ林下で土壌分析用に採取されたNo. 21（小館・中西，1986）を使用した。深さ80 cmの土壌断面の5層準からそれぞれ乾燥重量3 gを分析に供した。分析は5% KOH処理、フミン酸・コロイド粒子除去、ZnCl₂比重分離、HF処理、アセトリシス処理の順で行った。検鏡は、連続視野法で1000個に達するまで行った。ただし、No. 21-4, 5は花粉・胞子含有量が少なくそれぞれ400, 200個にとどまった。またいずれの試料も未同定花粉が30～40%を占めている。検鏡された花粉・胞子は、グラム当たりの個数に換算し、出現頻度は

同定された花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。

花粉分析結果を図7に示す。最下部（21-5）では、花粉数が738個/g、出現数12種類と個数、種類数ともに少ない。FSシダ胞子が50%を占め、木本では、マツ属 *Pinus* 17.7%、シイ属 *Castanopsis* 19.9%が同程度で出現する。上層にむかって、個数、種類数ともに増加するが、マツ属が減少し、逆にシイ属が増加する。30 cm深層（21-3）あたりからシイ属が50%以上を占め、ヤマモモ属 *Myrica*、ハイノキ属 *Symplocos*、ツバキ属 *Camellia*、イスノキ属 *Distylium*、テイカカズラ *Trachelospermum* などが随伴する。最上層（21-1）では1,488,750個/g、32種類となり、シイ属が78.3%と圧倒的となる。以上の結果から、現在のようなシイ林が形成されたのはシイ属が圧倒的に優勢し照葉樹林構成要素が出そろった30 cm深層準の時代だと考える。最上部（21-1）でマツ属とスギ *Cryptomeria* が数%の割合でシイ属に随伴するが、21地点周辺のシイ林内にマツ、スギは生育していない。これらの花粉はシイ林の周辺域から搬入されたものである。したがって、下部にみられるマツ属の20%の出現は周辺に現在以上のマツ花粉の供給源があったことを示し

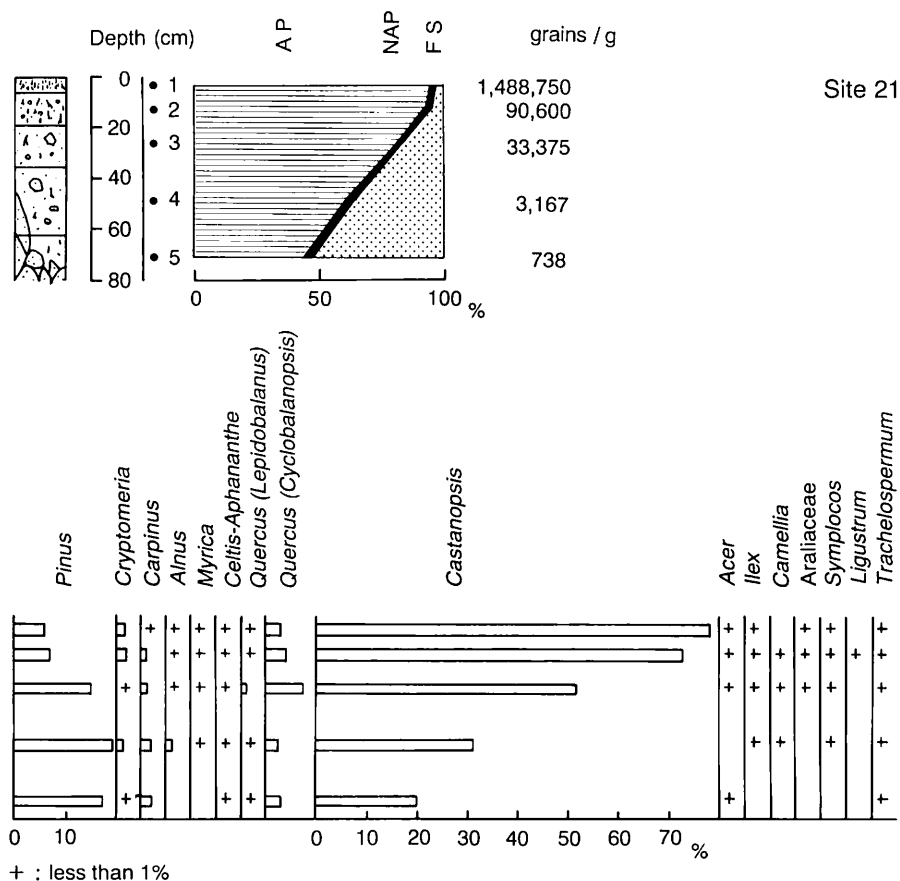


図7 太山寺シイ林下土壌の花粉分析結果

ている。50 cm 以下の時代ではシイ林が広範囲を優占するのではなく、マツ林や遷移途上のシイ林とともにモザイク状に分布していたと思われる。

6. 太山寺境内林と周辺の植生景観の変遷

江戸時代から明治時代（1800～1910 年）の太山寺周辺地域は、アカマツの二次林と荒れ地が広がっていたが、大正時代の終わり（1923 年）には周辺の荒れ地のほとんどが、広葉樹林に置き換わりマツ林とともに分布するようになる。この広葉樹林は現存植生からみてコナラなどの落葉広葉樹を主とするものと推定される。この変化は1895（明治 35）年以降六甲山系で広範囲に行われた植林によるものであろう。この状態は少なくとも第二次世界大戦後の 1947（昭和 22）年まで継続する。1967（昭和 42）年にはマツ林が減少し、コナラ、アラカシ等の広葉樹林が広く分布する。当時の太山寺の境内林は地形図上に広葉樹が印されているが、シイ、ウラジロガシ、ウバメガシなどの常緑の広葉樹からなる照葉樹林である（中西，1973；中西ほか，1982）。明治から大正時代の絵図（日本名所風俗図絵）と地形図（1910，1923 年）では太山寺境

内北部背山の一部と南部丘陵山麓に広葉樹のマークがみられるがこれが落葉なのか常緑なのかは区別することができない。花粉分析によると現在のようシイ林が形成されたのはシイ属が圧倒的に優占し照葉樹林要素が出そろった 30 cm 深層準の時代である。ただしこの土壌の年代を決定することは困難である。基盤の直上（土壌最下部 21-5）は花粉・胞子数が少なくシダが 50% を占めており、シイ属とともにマツ属が 20% 程度で出現する。このことは、花粉・胞子の保存性の問題を考慮しなければならないが、土壌試料を採取した 21 地点はかつては裸地化していた可能性があり周辺のマツやシイが分布を拡大し、徐々に植生が回復したことを示唆する。いずれにしても、太山寺の現在のシイの極相林は、比較的最近できあがったものといえる。花崗岩からなる透水性の良い酸性土壌、急峻な地形、乾燥気候などの条件下で、台風や地震などの自然災害と、人為的なかわりによって遷移・更新を繰り返し、潜在的にはシイ林が存続してきたのであろう。

以上のように、絵図と地形図から推定された植生変遷と、森林土壌の花粉分析結果は、一応矛盾なく対応し、

太山寺の現在のシイの極相林は、マツ林の時代を経てできあがったことが明らかになった。しかし、両者の対応を詳細に議論するためには、他の手法を用いたデータの補強や解析が必要である。

引用文献

- 小館誓治・中西 哲. 1986. 太山寺の照葉樹林と地形および土壌との関係. 神戸大学教育学部研究集録, 第77集: 113-130.
- 松下まり子. 1997. 六甲山系周辺における最終間氷期以降の植生変遷と人間活動. 地形, 18: 233-243.
- 三浦 修. 1990. 森林土壌の花粉分析—方法論的問題と森林群落の動態研究への適用. 植生史研究, No. 5: 3-17.

中西 哲. 1973. 垂水の社寺林について. 「垂水の自然」(室井 緯編), 174-191. 垂水ライオンズクラブ, 神戸.

中西 哲・服部 保・武田義明. 1982. 神戸の植生. 76 pp. 神戸市環境局, 神戸.

小椋純一. 1991. 絵図の利用による歴史的植生景観研究のための方法論. 京都精華大学紀要, 第1号: 1-21.

小椋純一. 1992. 明治中期における京阪神地方の里山の景観. 京都精華大学紀要, 第3号: 157-181.

(*〒657 神戸市灘区鶴甲1-2-1 神戸大学大学教育研究センター Research Institute for Higher Education, Kobe University, Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe 657, Japan)

(1997年10月3日受理)

映画評: 宮崎 駿監督. 1997. もののけ姫. 東宝.

この夏、空前のブームになったアニメ映画「もののけ姫」を見た。深く、重く、難しい作品であった。宮崎 駿氏はこれまでに自然と人間の間をテーマに、「となりのトトロ」、「風の谷のナウシカ」などの作品を手がけてきた。「もののけ姫」はこれらの作品に見られる自然と人間の共存関係とは違って、自然を破壊しなければ生きてゆくことができないという人間の業について真正面から立ち向かい、我々にその業を背負っていか自然と折り合いをつけていくのかを問いかけた。

時代は室町時代。舞台は人を寄せつけない深い神々の森と城砦のようなタタラ場である。主人公群は歴史の表舞台には姿を見せない製鉄集団、牛飼いななどの運送人達など。そして照葉樹の森に生きる山犬神や猪神といった自然そのものの神々だ。

これらの設定は、最近の歴史学・民俗学・考古学によって一般に流布されているイメージに対するもので、この国はずっと豊かで多様な歴史を持っていたとする。室町期は混乱と流動が日常の世界であり、21世紀の混沌の時代にむかってこの作品を作る意味がここにあるという。

最近の遺跡調査により、旧石器時代や縄文時代に対する時代観が大きく変化しつつある。古来より人間は生きるために自然に対して働きかけてきた。しかし古代から中世のある時期まではここから先は人間が入ってはいけない聖地があり、人は自然と調和して生きてきた。それ

を室町期頃に森を恐れなくなり、日本人は森の神シシ神を殺したのだ。

森を切り拓こうとする人間との争いに決着をつけようと、老猪がやってくる。少年アシタカは人間につくべきか、荒ぶる神につくべきか、「森と人がたたかわずにすむ道はないのか、本当に止められないのか」と悩む。タタラで作った鉄砲や火薬により森は破壊されつくし、ついにシシ神の首が落とされる。奪われた首を求め、シシ神の夜の姿、デイグラボッチが触れるものすべての生命をすいとりながら徘徊する。ようやくアシタカと少女サン(人間でありながら人間でないもののけ姫)がシシ神の首を取り返しデイグラボッチにそれを返す。一夜明けてみると、破壊され尽くした山に、草が生え、実生がのびる。しかし荒れた山には二次植生しか戻らなかった。

甦った森をみてサンは「甦っても、ここはもうシシ神の森ではない」そして「アシタカは好きだ。でも人間を許すことはできない」と。少年はほほえみながら答える。「それでもいい。サンは森で、私はタタラ場で暮らそう。共に生きよう」と。

基本的にはフィクションの世界でありながら、少年の村のモデルには白神山地が、照葉樹林のモデルには屋久島が選ばれ、タタラ場や巨人伝説、犬神伝説などについても十分研究した上での制作であるため、見応えがある作品となっている。

(松下まり子)